

森春濤の詩一首

——三河吉田の女郎の詩——

狩野 充徳

一 はじめに

学部三年生の講義「中国語史」では、例年先ず日本漢字音の呉音・漢音・唐音等について概説した後、我々が日常生活で使用したり、見聞したりする漢字・漢語の音について一寸考えてみることにしている。いうまでもなく、日本字音は漢語音韻学（特に中古音）を研究する上での一つの重要な外国借音である。ではあるが、この講義ではここ数年來受講生の学力低下に伴って、何も漢語音韻学の専門家に要求されるような高度にして深い内容を追求することにはしていない。日本字音を漢語音韻学或いは国語学の一分野として難しく考えるのではなく、それは我々日本人の生活とは切っても切れないものなので、日常生活での漢字音について少し立ち止まって考えて見ようというのである。そうすると、我々が普段は見過ごしている、何も気にしない、無意識裏に接している時には気付かない、様々な面白い、また反省させられる現象・事実に出くわすことがある。要するに難解な「漢語音韻学」、その一分野を専門の研究者の立場に立

って学ぶというのではなく、日本人として日常の常識的な漢字・漢語の、そのまた一部の漢字音について、肩を張らず一寸考えてみようというのである。この講義ではそのような方針で、いつも日本の地名・人名・官名・書名等の固有名詞を取り上げて、漢字音を考えてみることにしている。

昨年であった。講義出席者にそれぞれの出身地の呉音に読む地名を書き集めてみなさいと尋ねたことがあった。その内の一つとして愛知県豊橋市を取り上げた。そこで、吉田東伍著『大日本地名辞書』^{注①}第五卷「北国 東国」を繙いたところ、「三河渥美郡」の「豊橋」の項目に「今豊橋町、人口二万、東参河の都会とす、……（中略）又設楽郡に至る支線鉄道あり、豊川線と名づく」と説明があり、この後に

「招客古謡称吉田、楼佳妓妙久喧伝、倚欄長袖覺斑纈、露指參々最可憐、 春濤」

と漢詩を引き、「豊橋は旧名吉田^{ヨシダ}、維新の際之を改む、……（下略）」と説明が続く。筆者は、地名を考える折、角川書店・平凡社・三省堂・小学館その他の出版社の地名辞典を押しつけて、この『大日本地名辞書』をよく利用している。それは単に地理学的な説明をしているのみならず、日本の漢文・古文で書かれた古資料、特に文学関係のものをよく引用しており、それを読むのが面白いからである。ここでも「春濤」の詩がなかなか面白かったので、この漢詩の読解に旁鶩することになり、かくて呉音読み地名を考えるところ

ではなくなる。この時の授業では聴講生に対して、ざっと訓読して一通りの意味を説明し、多少の感想を述べたに過ぎなかった。その後、別な資料で東海道五十三次の岡崎や宮についても漢詩を読解することがあったので、豊橋、旧名吉田を発して岡崎・宮と京都へ上がりつつ、その当時天下に聞こえた、これら宿場の遊郭に関する漢詩を読解してみるのも面白いのではないかと考えたのであった。という訳で、小論ではこの春濤の漢詩一首を読解してみることにする。

二 春濤の漢詩一首

春濤とは、いわずと知れた幕末から明治にかけて活躍した、尾張一の宮（現愛知県一宮市）出身の著名な漢詩人森春濤（文政二年・一八一九年～明治二十二年・一八八九年）である。その子に森槐南（一八六三～一九一一）という、これまた有名な漢詩人がいる。春濤は名古屋で漢詩人として活躍していたが、明治七年（一八七四）秋、岐阜の宅を引き払って東京へと上り、そこで漢詩塾を開いて大いに勢力を広げ、当時の東京詩壇の重鎮大沼枕山・小野湖山を押さえて、詩壇の頂点に立った。艶体詩を得意とし、竹枝と香奩体が目立つという注②。この小論で取り上げるのも、そのような艶体の詩である。春濤の詩は明治四十五年（一九一二）刊行の『春濤詩鈔』に二千三百六十五首が収録されているという注③。『大日本地名辞書』に引用する「招客古謡称吉田、楼佳妓妙久喧伝、倚欄長袖霓斑纈、露指慘々最可憐」なる漢詩は詩題が不明である。これを汲古書院刊行の

『詩集日本漢詩』第十九巻に収める『春濤詩鈔』注④によって調べてみても、生憎この詩は未収である（その理由は幾つか考えられるが、ここには触れない）。また、春濤についての年譜があつて参考になるのかどうか、未調査である。従つて、この詩は「詩題」が分からず、制作年月も分からない。詩中に「吉田」というから、幕末であると単純に考えることもできない注⑤。明治になつてから作られた可能性もある。また、その地に実際赴いて詠んだのではなく、頭の中で空想して詠んだ可能性もあるが、今はそう考えない。実景として詠んだ、例えば明治七年十月作の「二十日宿豊橋駅是夜雨」詩と同じ時に詠んだという可能性も完全には否定しきれないであろう。詩題はその詩を解釈する上で、非常に重要なものである。その詩が作られた経緯を明らかにすることができ、何よりもその詩の内容を端的に表している。詩題の意味が分かれば、その詩は半分解できても同然だというのは、やや誇張に過ぎるかもしれないが、それほど漢詩解釈上重要なものである。それ故、このようなことで、この詩が解釈できるのかと読者は片腹痛いことであろう。筆者も同様の懸念を抱く。また、あの清初の大儒顧炎武ですら反省しているように、大した学識がないのに資料を扱つて過ちを犯すことになるのではないかとも危惧する。今は資料調査に十分な時間も取れないが、已むを得ない、できるだけのこととしてはしてみた。

それでは、この詩を見ていく（以下、原文は旧字体）。

森 春濤

招客古謡稱吉田

客を招くと古謡に吉田を称す

樓佳妓妙久喧傳

樓は佳にして妓は妙なること久しく喧伝す

倚欄長袖霓斑纈

欄に倚るは長袖霓斑の纈

露指慘々最可憐

露指慘々として最も憐れむべし

口語に訳してみると、次のようになろう。

ここ吉田は妓樓の女が通りがかりの人に「お客さん、寄つてらっしゃい」と声を掛けると、昔の歌に歌われている。

妓樓の造りは立派で、妓女は優れていると久しい昔から天下にいいふらされている。

二階の手すりにもたれている妓女は、長袖の鹿の子模様の絞り染めである。

あらわになつたその指は白くほつそりとしていて、この上なく愛らしく心惹かれる。

七言絶句で、平声先韻(田・憐)・仙韻(傳)の通韻である。

以上は、この詩を東海道五十三次の吉田宿の遊郭の遊女ということで解釈したのである。それは実際には町の一角に集中し、独立した(旧赤線の如き)遊郭地区の遊女というものではなく、街道筋の宿屋の飯盛り女、所謂宿場女郎のことであろう(売笑を事としない、ただの旅館もあつたであろうが、恐らくは飯盛り女のいる宿の集中した街なのであろう)。旅人に「この宿に泊まりなさいよ、私たちが

接待をするから」と客引きをして、風呂・酒食・夜具といった世話は勿論、晩には一夜妻のような接待をもする、飯盛り女の様子を詠んだと考えられる(しかし、泊りではなく白昼の売笑もあつたであろう)。独立した遊郭地区における遊女を詠んだとする方が、漢詩としての雰囲気・情趣に相応しいと感じられるのではあるが。

ここから句毎に詳しく見ていく。先ず起句の「招客古謡稱吉田」。「古謡」は上引の『大日本地名辞書』に「東行話説」を引いた中にある「吉田通れば二階から、ちよいと招く、しかも鹿子の振袖が」という古歌である。インターネット(豊橋市札木町歴史資料館)で調べてみると、元禄の頃流行した京歌であるという。この古謡は、多分吉田の妓樓を通りかかった男に鹿子模様の振袖を着た妓女が声をかけて招き入れようとしていることを唱つたものであろう(妓樓・妓女は中国の漢語であり、遊女も同じである。中国では妓樓は妓院・妓館ともいうが、遊郭とはいわないようである。また、中国では女郎に妓女の意味がない)。この詩でも承句「樓佳妓妙久喧傳」から見て、妓樓の妓女が通りがかりの男に「お兄さん、どう。寄つてらっしゃい」とあでやかな着物をまとい、なまめかしい声でしなを作つて誘いかけていと詠んでいる。この句は本来ならば、「古謡稱吉田招客」となるべきであるが、これでは三十二・三となり詩のリズムが失われる。というのは、七言詩は二十二・二十三のリズムで語がまとまるからである。従つて、このように排列して二十二・二十三のリ

ズムを確保したのである。そして、この排列によって散文のような、単純な、通常の内容展開をも避けているのである。平仄上の理由からではない。というのは、「古謠稱吉田招客」であつても、二四不同「謠(平○)・吉(仄●)」、「二六対」謠(○)・招(○)、「二四不同」の規則に合うからである。この詩の通りでも、二四不同「客(●)・謠(○)」、「二六対」客(●)・吉(●)、「二四不同」客(●)・吉(●)であつて、平仄の規則に合っている。

承句「樓佳妓妙久喧傳」に移る。今その古謠に唱われた吉田に来てみると、妓樓の建物は立派で、妓女はなかなかの美人であか抜けていると久しい以前から天下に鳴り響いているが、確かにそうである。江戸時代には東海道五十三次の内、三河・尾張に限つていえば、吉田・御油・赤坂・岡崎・宮の各宿場が「春をひさぐ女性が多いので有名だった」と金森敦子はいふ注⑥。また、「伊勢古市の女郎は伊勢詣でのシーズンが終わると、人通りの多い東海道吉田宿や岡崎宿にやつてきて商売すること知られていた。滝沢馬琴は『吉田、岡崎とも、妓はことごとく伊勢より来たるものなり。ゆえに妓ばかり伊勢訛り』と書いている」注⑦ともいふ。今、馬琴の『壬戌羈旅漫録』注⑧を繙いてみると、以下のものである(句読は私に依る)。

吉田の飯盛 附銜妻

よし田のめし盛、夏は越後ちゞみにおなじ縞の前垂をかけ、手に團扇をもちて夜行す。よし田・岡崎とも、妓はことごとく伊勢より来たるものなり。ゆゑに妓ばかり伊勢訛りなり。妓席上

にて三絃を鳴すに、かむろたちなどうたふことあり。絶倒するに堪たり。今切のわたしを経て西は、人物その外江戸にあらず、京にあらず。中國の風姿こゝに於て見るべし。土地の婦人はかならずしも美ならず。商家の銜妻などを見れば、黒暗天女の如し。

よし田をか崎の妓樓 附矢知はし

よし田・をか崎・四日市などみなめしもりをかりにやり、ことごとくよびよせて見たてるなり。客あるものも必ず来る。「割注」：妓を一軒に一人をゆるさる。一軒二人ある家あり。三人抱くことをゆるさず。妓なき旅店は妓ある家より月々資料をおくるといふ。ゆゑに大樓は妓二人ををくなり。よし田・をかさき一驛の妓百餘人あり。「こんやは都合がわるいといふことをつもりがわるいといふ。よし田・岡さきより西、伊勢の妓樓みなおなじ。京都祇園にては誰さんはなりませぬといふ。大坂新町にては、誰さんはあけてござりますといふ。をかさきちようじ屋の八重といふめしもり、少しく顔色美なり。ひようばん價よりたかし。(以下略)

「吉田の飯盛 附銜妻」の記事を先ず見てみる。吉田の妓女は客の少ない農閑期に伊勢の遊郭(古市・一身田など)からその対岸にして旅人も多い東海道の宿場で三河のここへ、いわば出稼ぎに来ていたのであろう。当時、伊勢街道を北上して東海道に出る、伊勢から舟で吉田へ向かう、この二つのコースがあつたようである。従つて、

吉田の女郎には伊勢訛りが多いというのである。また、三河のこの地は人物その他(方言・習慣・地理的位置など)、江戸でもなく、京都でもない、その中間の中つ国であるともいう。現在名古屋を中京と呼ぶ所以でもあろう。更に馬琴はこの地の婦人は必ずしも美人ではなく、商売人の家の街妻(他人の妻の罵詈雑言)などを見ると、これが容貌実に醜悪な黒闇天女のようなたと悪口をいっている。馬琴が僅かに見聞した範囲であるから、百パーセント正しいという訳では勿論ないが、事実の一斑は得ているのであろう。何処の地にても美人もいれば醜人もいるのであって、ただ前者の方がずっと少ないが故に、引き立って尊ばれるのである。

次に「よし田をか崎の妓樓」の記事からすると、吉田には妓女が百人以上いたのであろう。この春濤の詩は、上に見たように旅籠で春を鬻ぐ宿場の飯盛り女を詠ったのであるが、それを妓樓の妓女として、漢詩に相応しい漢語表現にしたのである。そうする方が、容色といい、年齢といい、立ち居振る舞いといい、客との会話やその折の機転の利きといい、更にいえば性的技巧といい、全ての面で通常の飯盛り女よりは上等・高級に感じられもするのである。なお、豊橋の遊郭注⑩は、約六十年前の兵燹に焼かれて注⑨現在残っていないと聞いている。

転句「倚欄長袖霓斑縵」に移る。古謡に唱われた吉田と天下に喧伝されたその妓樓・妓女の良さとを詠う、ここまでの二句は春濤の伝聞であるが、この句以下からは春濤が自ら实地に目睹した光景で

ある。二階の手すりにもたれたまま、妓女は鹿の子模様の絞り染めの長袖の着物を着て、往来を行き交う人々を眺めている。その着物、とりわけ長い振袖のあでやかさ。若い妓女が着ているのは実に似つかわしい。この妓女を正面よりも横から見る方が詩的興趣により富むであろう。更にいえば、愁眉を開かない憂愁の面持ちで、何もいわずに往来を眺めているのであれば、漢詩としての情緒は最高である(下文に引く「古詩十九首」の、もと倡家の女が旅に出たまま帰らぬ夫蕩子の帰りを待ちわびて、愁いに満ちた面持ちで外を見やっっている詩を参照されたい)。だが、この詩では客を取ろうと、なまめかしい姿態で往来の男どもに優しい声をかけて呼び込んでいることを詠う。漢詩・唐詩といった中国の詩を読んで感じられるような趣きではない。金銭と結びついた、俗世間のおいが背後から感じられるのである。

結句「露指摻々最可憐」である。妓女の袖からあらわになつて見えるものは、それは張りのある、柔らかな、暖かみのある、白くないな、——鹿の子模様の赤い袖に隠れているのであるが、そのかいながら伸び出た白い細い指である。何という白さであろうか。誠に愛おしく、そくそくとして男の心を惹くものがある。久米の仙人の見た女の白い脛とはまた異なる色つぼさ、なまめかしさを感じる。「摻々」は細く美しい女の手のさまをいう。美人の白いほっそりとした指の手であり、下文に見るように「素手」である。「織織」とも表記する。この語は『毛詩』魏風、葛屨に「摻摻女手、可以縫裳」と見

えるものである。毛伝に「摻摻、猶織織也」といい、孔穎達疏に「正義曰、摻摻爲女手之狀、則爲織細之貌、故云猶織織。説文云、好手。

古詩云、織織出素手、是也」という。『毛詩音義』（『經典釈文』）は「摻、所銜反、又所感反。徐又息廉反。説文作摻、山廉反。云、好手貌。織、息廉反。……」という。孔穎達疏にいう「古詩云、

織織出素手」とは、『文選』卷二十九「古詩十九首」第二首の「……河畔草、鬱鬱園中草。盈盈樓上女、皎皎當窗牖。娥娥紅粉粧、織織出素手。昔爲倡家女、今爲蕩子婦。蕩子行不歸、空牀難獨守」というものである。この李善注に「韓詩曰、織織女手、可以縫裳。薛君曰、織織、女手之貌。毛萇曰、摻摻、猶織織也」という（この語について、陳奥・馬瑞辰・王先謙といった清人の疏や、同じく清、段玉裁の『説文解字注』等を引用するなどして、これ以上の考証をすることは避ける）。

春濤が「摻々」という語の典拠として依つたのは『毛詩』ではあるが、意味内容としては『文選』の「古詩十九首」の「娥娥紅粉粧、織織出素手」を意識しているのは間違いないであろう。即ち、この語そのものの直接的典拠としては、表面的には確かに『毛詩』（「文選李善注」に引く「韓詩」は既に佚している）であるが、詩の内容、詩的雰囲気、詩的世界からすると「古詩十九首」である。というのは、そこでは「盈盈樓上女、皎皎當窗牖。娥娥紅粉粧、織織出素手。昔爲倡家女、今爲蕩子婦」とあって、この春濤の詩に表現内容がよく似るからである。「古詩十九首」は「盈盈たる麗しい樓上の女が、

皎皎と真つ白く輝くばかりの顔をして窓辺で外を眺めている。紅や白粉で化粧して娥娥たる美しさ、この女は織織として白いほっそりとした手を見せているのが、何とも可愛らしい。『私はもとお茶屋の唄い女でしたが、今では旅に出たまま帰つてこない男の妻となりました』と詠う。

春濤の詩の承句を先ず見てみる。春濤は「古詩十九首」の「盈盈樓上女、皎皎當窗牖。娥娥紅粉粧、織織出素手。昔爲倡家女」、即ち樓上にいる、化粧をして麗しい、もと倡家の女から「樓は佳にして妓は妙なること（樓佳妓妙）」と詩に表現したのである。春濤詩は妓楼であつて、「古詩十九首」の樓上（高殿）の民家ではない。春濤詩の女は、妓楼の妓女として歌舞は勿論、それ以上に売笑を事とするが、「古詩十九首」の女はもと「倡家の女」であつて、樂器を弾いて歌を唱つたり、舞つたり、酒をついで客の相手をしたりして酒席の興を助けてはいたが、必ずしも売笑の女ではない。今ではこの「蕩子」の妻となつていて、春濤の詩のような売笑婦ではない。尤も「古詩十九首」でも、この蕩子が倡家に何度も通う内に、この「倡家女」と懇ろな仲になり、肉體關係が生じたことは十分に考えられる。

春濤詩の転句に移る。「倚欄長袖」は「古詩十九首」の「盈盈樓上女、皎皎當窗牖。娥娥紅粉粧、織織出素手」からの連想である。即ち「古詩十九首」では樓上にいるこの女が窓辺に出て来て、直ぐ下の往來を見たり、或いはまた街道の遠い先を見やったりして、旅に出たままの夫の帰りを待ちわびている。一方、春濤詩は「古詩十九

「首」の人妻が窓辺に出て来て往来を眺めるのを、妓女であるから妓楼の二階の手すりに凭れて長袖の麗しい着物を着て、往来を通行する男どもに声を掛けようとして詠う。「古詩十九首」では「長袖」という表現はないが、「織織出素手」から着衣の袖に隠れて白い手が見えないこともあるのであって、この人妻の着ている衣の袖も長いことが推知されるのである。

春濤詩の結句に移る。「露指參々最可憐」は「古詩十九首」の「娥娥紅粉粧、織織出素手」からの連想である。即ち「古詩十九首」では「袖口からあらわれている、ほっそりとした、白い手」を、春濤詩では「白い指」とする。こうして春濤詩は「手」からその先の十本の白い「指」へと、描写の目がより細部に届いている。

以上、「古詩十九首」は旅に出たままの夫の帰りを今か今かと待ちわびている、もと茶屋の唄い女で今は人妻となった女の孤独、寂しさを詠うのである。春濤詩は「古詩十九首」の表現を下敷きにしなげらも、吉田の遊郭の遊女の着物のあでやかさ、その白い指のなまめかしさに心が惹かれると詠っている。詠う対象の女の境遇も、場所も、詩の主題も異なる。共通するものは女の白い手であり、指であり、また化粧をした顔の麗しさである。いずれにしても「古詩十九首」の人妻であれ、春濤詩の妓女であれ、見目麗しい美人で、顔は月の光の如く白く輝き、ほっそりとした白い手とその指が男を惹き付ける魅力であった。美人の絶対条件の白さ（顔や肌えの白さは勿論）、白い手や指が詠まれているのである。馬琴から見れば、正に

「色の白いは七難隠す」であろうが。

今一度この詩を全体的に振り返ってみよう。起句・承句で妓楼の建物とそこから道行く人を見下ろして、声を掛ける妓女の姿が大きく捉えられる。転句でその妓女の着ている着物、更にその袖へと焦点が絞られてゆく。結句になつて、その袖より出た、妓女の白い、細い指。春濤は男の目を通して、大から小へと視点を絞り込んでいる。また、鹿の子模様の絞りの着物のあでやかさ、鮮やかさ——赤・緑の原色、それと対比するかのような細い指の白さ。色彩感覚の鮮やかな対比表現でもある。

なお、ほっそりとした手を表現したものとして、春濤の詩には「茜裙相喚下湘流、織手盪來歌仄柔（茜裙相ひ喚びて湘流を下る、織手盪し来たりて歌仄柔なり）」（『春濤詩鈔』卷二「雙槩」と「織手」の語が見える。春濤の子、槐南の詩にも「女手參參桑葉柔、東阡西陌緑陰稠（女手參參として桑葉柔らかに、東阡西陌緑陰稠し）」（『槐南集』卷十三「漫興七絶」第六首。注①）と「參參」の語が見える。また、春濤の詩に「箇箇佳人花一樣、含嬌含笑槩相迎（箇箇の佳人花と一樣、嬌を含み笑を含みて槩として相ひ迎ふ）」（『春濤詩鈔』卷十六「題嬌笑樓」と甲斐甲府の妓楼の妓女の嬌態が詠われている。更にまた、小畑詩山著『東海道中詩』（天保八年・一八三七年刊。注②）の「吉田」に

往来垂暮旅人多、逆旅流行聞艷歌、樓上有聲招者執、翠紅長袖

小嬌娥。

(往来暮に垂なんとして旅人多く、逆旅流行艶歌を聞く。楼上声有り招く者は孰れぞ、翠紅長袖の小嬌娥)

という詩がある。夕暮れ時、旅人がそろそろ宿を探す頃である。宿屋から三味線などを鳴らしつつ謡う、はやり歌が聞こえてくる。二階からは「もし、お客さん、ここにお泊まりなさいよ」と旅人を招き寄せる声、見れば緑や赤の派手な模様の長袖を着た新造であつたというのである。楽器を鳴らし、歌を唱つて旅人の耳目を惹き付け、二階は二階で若い遊女が媚びた声で客を呼んで泊ませようという考えである(今でも広島の流れ川など狭斜の巷を彷徨盤桓すると、旅館の客引きではないが、ミニスカートの綺麗な若いお姐さんが酔漢の男どもに声を掛けてバーに誘うが如きである)。この詩には春濤が詠んだ詩と同じような光景が詠まれている。ただ、春濤詩の方が恐らくはやや年代が降るであろうが、それでも五十年以上の時間差はないであろう。そして、上記の『槐南集』巻十九「送横川唐陽赴豊橋(横川唐陽の豊橋に赴くを送る)」(明治二十二年・一八九九年作)にも「陌頭鶯亂啼相送、樓上花穠笑欲呼。豊橋即古吉田。此句本俗謠。(陌頭鶯亂れ啼きて相ひ送り、楼上花穠く笑ひて呼ばんと欲す。豊橋は即ち古の吉田。此の句は俗謠に本づく)」とあり、春濤の詩と同じく、吉田の俗謠に基づいた詩句がある。

三 おわりに

勿々に稿を成したために、十分な資料調査ができなかった。以下、この反省や今後の課題について三点述べておきたい。

第一点はそもそもこの詩が確かに春濤の詩であるのか、何という題であるのか、その詩集に収められているのか、未収(佚詩)なのか、もし未収だとすれば何故なのか、『大日本地名辞書』の著者吉田東伍は何によつて春濤の詩を見たのか、といった最も基本的な問題がある。

第二点は妓女の衣裳、艶やかな姿態、白い手(指)などについて、取り上げたこの詩が漢詩である以上、春濤が読み、依つたであろう、唐詩のそのような詩を取り上げて比較考察するのが、最も基本にして穩当なやり方であろう。更には、六朝詩や宋から清までの詩をも博搜すべきであろう。実際「摻摻」を『漢語大詞典』で調べてみると、南朝宋詩や唐詩などに使われていることが分かる。また、『三言二拍』を始め、『金瓶梅』や『紅樓夢』といったような明清白話小説中に出てくる妓女との比較も面白いのではないかと考えられる。これらについては、今後の調査に委ねたい。

第三点は春濤の詩に、同じような題材や詩語、詩句がないか、上掲の『春濤詩鈔』で探してみることも必要である。更には春濤の師である梁川星巖(一七八九〜一八五八)や大沼枕山等、幕末から明治までの漢詩人(頼山陽・広瀬淡窓・広瀬旭莊等。春濤の子の槐南も含む)の詩集を博搜することも必要であろう。

こうすることによつて、この詩を一層精確に解釈することができ、

詩的情緒をより深く感じることができであろう。また、詩の読解のために、その背景を考証することは勿論大切であるが、詩の興趣、雰囲気、味わいを打ち壊さないためには、考証した結果の史的事実に余り囚われ過ぎない方がよいのではないかと思う。

なお、蛇足的補足であるが、筆者は昭和六十三年十月と平成十二年十月と、これまで二度豊橋に行ったことがあるが、この詩の舞台になった辺りや吉田城等は見学したことがない。岡崎・一宮と併せて回ってみたいと思っている。時代が違い、街も違つてはいるが、現地訪問をして、そこでその詩を考えてみるというのは意味のあることである。

最後になったが、『豊橋市史』の資料は中京大学福井佳夫教授のお手を煩わした。ここに記して謝意を呈する。

〔注〕

- ① 吉田東伍著『大日本地名辞書』（富山房。昭和五十一年・一九七六年増補再版。もと明治三十五年・一九〇二年）
- ② 揖斐高「森春濤小論」（『新日本古典文学大系「明治編」』2「漢詩文集」。岩波書店。二〇〇四年に所収）を参照。また、田口卯吉編『大日本人名辞書』第四冊（講談社学術文庫本。講談社。昭和五十五年・一九八〇年）二六八五頁。

③ 注②の『新日本古典文学大系「明治編」』2「漢詩文集」に所収する入谷仙介・揖斐高校注「春濤詩鈔（抄）」の本文直前の解説に依る。

④ 『詩集日本漢詩』第十九卷『春濤詩鈔』（汲古書院。平成元年・一九八九年）

⑤ 注③の「春濤詩鈔（抄）」六十五頁に明治七年（一八七四）十月作の「二十日宿豊橋駅是夜雨」詩があり、その注十五に「愛知県豊橋市。江戸時代には吉田と呼ばれていたが、明治二年に豊橋と改称。……」という。

⑥ 金森敦子著『伊勢詣と江戸の旅』（文春新書。文藝春秋社。平成十六年・二〇〇四年）二百十二頁。

⑦ 注⑥の『伊勢詣と江戸の旅』二百十二頁。

⑧ 曲亭馬琴著『壬戌羈旅漫録』（吉川弘文館『日本隨筆大成』第一期1、昭和五十年・一九七五年）百八十三〜百八十五頁

⑨ 昭和五十八年（一九八三）刊行の『豊橋市史』第三卷第六章第二節「遊郭と麁娼運動」の「芸娼妓の取締」に

豊橋における遊郭の歴史は、すでに江戸時代の東海道吉田宿の頃より、宿駅の中でもつとに有名になっていた。宿駅には、旅籠屋を設けることが認許されており、ここに飯盛女を置いたのである。その場所は、札木と上伝馬であり、これが維新以降明治四三年（一九一〇）東田遊郭移転完了まで続いたのである。……なお、吉田宿時代の飯盛女の出身地は伊勢

方面が多く、その数は上伝馬だけで一〇〇余名であったとい
う。

という。なお、札木・上伝馬・東田はインターネットで検索でき、
参考になる。

⑩ 昭和六十二年（一九八七）刊行の『豊橋市史』第四卷第一章第
五節二「戦争激化と市民」に依れば、昭和二十年（一九四五）一
月以来空襲を受け、六月二十日の空襲で灰燼に帰し、全戸数の七
十パーセントが焼失したという。

⑪ 『詩集日本漢詩』第二十卷（汲古書院。平成二年・一九九〇年）
所収の『槐南集』卷十三「漫興七絶」第六首

⑫ 『紀行日本漢詩』第三卷（汲古書院。平成四年・一九九二年）
所収に依る。